

## 近代文典におけるいわゆる推量助動詞

井島 正博

はじめに

近代文典は、文語中心に展開された。口語の研究は後発的であり、その際、著者の特別な意図を体现していたという点で有標であった。その点、現在の状況とは大きく異なる。本稿で見ているようにとする近代文典は、そのうちでも当時むしろ無標であった文語に関する文典の方である。

また、言うまでもないことながら、ここで論じたいのは、文語の文法そのものの記述ではなく、近代における文語文法——中古語を範とする古典語規範文法——の記述の仕方の史的变化、すなわち、日本語史ではなく、日本語学史というメタレベルでの日本語の歴史である（ちなみに、近年は、日本語学史をさらにメタレベルで研究する、日本語学学史とでも言うべき研究も見られるが、ここではそこまで論じようとするつもりはない）。言い換えれば、近代におい

て、日本語研究者が日本語の文法とはどのようなものであるか、という認識の歴史である。

さて、日本語文法学史というものも、完全に中立的で客観的な歴史というものはあり得ない。あえてそれを目指そうとすれば、それぞれの研究を、単に時系列に沿って、ばらばらにめりはりなく列挙していくだけになってしまう。相互の影響関係や、それぞれの優れている点、不十分な点を指摘していくようにすれば、否応なくいずれかの立場に関与せざるを得ないことになる。それは避けられないことであり、隠蔽すべきことでもない。

それにはさまざまな立場がある。福井久蔵（一九〇七・一〇、三四・三、四二・四）のように、同時代的に個人間の交流による影響関係、語学外の社会的状況から描くこともできる。また、山田孝雄（一九四三・七）、時枝誠記（一九四〇・一二）のように、独自の文法理論を背景にそこに

至り着くまでの理論的な発展として描く描き方もある。さらに、それぞれの文典を比較検討することによつてその異同を明らかにしつゝ影響關係を文献学的に闡明していく古田東朔（一九七二・一一他）や山東功（二〇〇二・一）などの方法もある。

しかるに、ここで採用しようとするのは、時代による文法に関する認識の枠組の変遷を明らかにしようとする立場、すなわち、成功するかどうかを度外視して言えば、M・フーコーの觀念史に倣おうとする立場である。認識の枠組は、M・フーコーも論じるように、世紀という単位で変化するということが常態であろう。しかるに、その変化の時機は、生物の進化も、緩慢に連続的に進行したのではなく、ある時期に断続的に、いわば突然変異として進行したように、あるいは、科学革命も、通常科学といういわば停滞の時機をはさんで、ニュートンやアインシュタインの段階で突然革命を迎えるように、認識の枠組も短期間に変化するものであると考えられる。ここで問題にしたい文法理論も、学問的な認識の一部であり、明治という激動の時代は、学問的な認識の枠組も大きく変貌した時機であると言つても、特に目新しい指摘であるはずもなく、異議を差し挟まれることもないだろう。

そのような立場で文法理論の展開を論じていくとすれば、従来の研究方法とどのような点で異なることになるだろう

か。確かに従来のように、ここで見ていく近代第一期の文典は、研究というよりも（初等・中等）教育の方に軸足があり、新見に乏しく学史的にも価値のないものばかりである、という見解にもそれなりに理はある。そのような中で、大槻文彦の『広日本文典』や山田孝雄の『日本文法論』は現在の段階でも評価すべき点が少なくない、と言われることも尤もである。しかし、これはあくまで現代の文法研究を評価の基準として、いわば進歩史観に立つてそれ以外の文典を切つて捨てていくことになつてしまふ。

ここで採りたい立場は、むしろそのようにこれまで切つて捨てられてきた文典の方にこそ、その時代の認識の枠組が反映しているのではないか、というものである。現代の目から見ても、あるいは恐らく当時としても、月並みで目新しいところのない文典類は、むしろかえつてそのために、意図せずその時代の文法の認識のしかたをあまり歪めることなく反映していると考えられるのではないだろうか。そしてそのようなその時代の認識の枠組を“地”として、現代でも評価される、大槻や山田の文典が“図”として浮き出しており、場合によつては、静かな水面に小石を投じて生じる波紋のように、それらが認識の枠組に動揺を与えて変更を強いる、という形で、大小の認識革命を画している」と了解される。

そのような立場で議論を展開するとすれば、価値評価に

関しては判断停止して、それぞれの文典の背後に伏在する文法観をさまざまな観点からあばきだすことに力を集中することになる。どの文典がどのような点で他のものよりも優れているか、どの文典が他のどの文典の影響を受けているか、その背後で著者同士のどのような交流あり、どのような社会情勢が働いているのか、などは、もちろんまったく無関係なことではないので必要に応じて触れる必要はあるが、主役を演じることはない。本稿では、そのようなものとして文法学史を描いていきたい。

さて、現在、古典語文法で一括して「推量助動詞」と呼ばれることを、われわれが何の疑いもなく受け入れている、ム・ラム・ケム・ベシ・マシ・ラシ・メリに打消推量のジ・マジは、近代の初めからそのようにカテゴリー化されていたわけではなかった。それが現在のような外延を持つ「推量助動詞」というカテゴリーが成立したのは、一九四〇年代に入ってからであるようである。ここではそれ以降、現代にまで引き継がれてきた、そのような外延を持つカテゴリーに、伝聞推定助動詞ナリを加えて、「いわゆる推量助動詞」と呼ぶことにしたい。

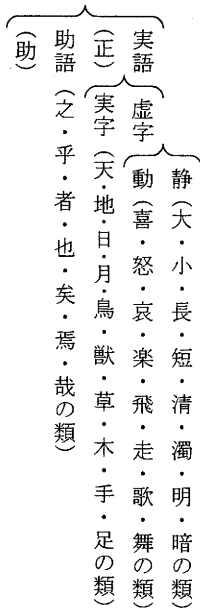
本稿では、近代に入つていわゆる推量助動詞という形に固定化するまでの有様をたどることで、現在、特に反省することなく自明のものとして用いている「推量」という概念を考え直してみる契機としたい。

## 1 カテゴリー化

ここで、当たり前のように「推量助動詞」という言い方を用いているが、どの助動詞が推量助動詞と考えられているか、と問う前に、そもそも助動詞がさらにいくつかのカテゴリーに分けられる、という認識がなければならぬ。勿論、さらにその前に、発話・文章が単語に分けられ、それが助動詞も含めた品詞に分けられるという認識がなければならぬ。第一段階の品詞分類は、近代初期にも見出されるが、助動詞をさらにいくつかのカテゴリーに分けたものは、少なくとも明治一桁の間は見出されない。そこでまず、第一段階としての品詞分類、そして第二段階としての各品詞、特に助動詞の分類がどのように進化したのかを系統立てて確認していきたい。

カテゴリー化そのものは、必ずしも近代になって欧米の文典の影響によって成立したものではない。古田(一九七二・一一)によると、近世の国学における語のカテゴリー化は、漢語学の影響が大きいという。荻生徂徠『訳文筌蹄』(宝永八年(一七一七))によると、形状字面・作用字面・声辞字面・物名字面という分類と、半虚字・虚字・実字・助字という分類を挙げるが、およそ、それぞれ形状字面ないし半虚字が形容詞、作用字面ないし虚字が動詞、物名字

面ないし実字が名詞、声辞字面ないし助字が助詞・助動詞に相当する。また同じく、荻生徂徠『訓訳示蒙』（明和三年（一七六六））に挙げられた、語の分類である「字品」における分類は以下のようなものであるという。



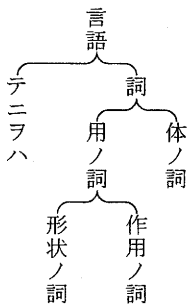
さらに、伊藤東涯『操觚字訣』（宝暦十三年（一七六三））は、実字・虚字・助字に加え、「嗚呼・如何・稍・亦・凡・嘗・抑・又」などを含む語辞を合わせた四分類をしており、東涯には、他に『助字考』（天禄六年（一六九三））、『用字格』（正徳元年（一七一））がある。

また富士谷成章の兄の皆川淇園が著した多くの語学書、『実字解』（寛政三年（一七九一））、『虚字解』（天明三年（一七八三））、『統虚字解』（寛政四年（一七九二））、『虚字詳解』（文化十年（一八一三））、『助字詳解』（文化八年（一八一））の中では、実字・虚字・助字の三分類を採っている。

このような漢語学における品詞分類の影響を受けて、近世の国学においても日本語の品詞分類が試みられる。富士谷成章『あゆひ抄』（安永七年（一七七八））では、品詞を人にぞらえて、名（名詞）、装（動詞・形容詞・形容動

詞）、挿頭（代名詞・副詞・接続詞・感動詞・接頭語）、脚結（助詞・助動詞・接尾語）の四類に分けていた。さらに、そのうちの脚結は、属、家、倫、身に四分類されるが、そのうちいわゆる推量助動詞は倫および若干のものが身に分類される。すなわち、可倫にベシ、不倫にジ・マジ、将倫にム・マシ・ラム・ラシ、来倫にケム、めり身にメリ、なり身にナリが配属される。

また、鈴木胤『言語四種論』（文政七年（一八二四））では、品詞を体ノ詞（名詞）、形状ノ詞（形容詞）、作用ノ詞（動詞）、テニヲハ（助詞・助動詞・感動詞・陳述副詞類・接尾語）に四分類する。テニヲハはさらに、独立タルテニヲハ（感動詞）、詞ニ先ダツテニヲハ（副詞・接続詞）、詞ノ中間ノテニヲハ（格助詞・接続助詞・係助詞）、詞ノ後ナルテニヲハ（終助詞・間投助詞）、活語ニツケルテニヲハ（助動詞）に細分化される。



それに対して、他方で洋文典に範をとる洋学系の品詞分類がある。箕作阮甫が翻刻した『和蘭文典 前後編』（天保十三年（一八四二）・嘉永元年（一八四八））の翻訳である

大庭雪斎『訳和蘭文語』(安政二年(一八五六))は、実辞(名詞)・性辞(形容詞)・陪辞(連体修飾語)・数辞(数詞)・代辞(代名詞)・活辞(動詞)・副辞(副詞)・冒辞(接続詞)・接辞の九品詞に分けている。

時代的には若干逾るが、そのようなオランダ語文法を日本語にあてはめたものとして、鶴峯戊申『語学新書』(天保四年(一八三三))が現われる。そこでは実体言(名詞)・虚体言(連体修飾語)・代名言(代名詞)・連体言(動詞連体形)・活用言(動詞)・形容言(副詞)・接続言(接続助詞)・接続詞(指示言(所在時刻を表わす格助詞)・ニ・ヲ・ヨリ)・感動言(感動詞・終助詞)の九品詞に分類している。

蘭学に遅れて英学が盛んになり、次第に英学が中心となるが、幕末から近代初期にかけて最もよく用いられた英文典の1つは、『英吉利文典』(The Elementary Catechisms, English Grammar 第五版 慶応二年(一八六六))である。そこには次の八品詞が挙げられている。

In English there are eight sorts of words, — Nouns, Verbs, Adjectives, Pronouns, Adverbs, Prepositions, Conjunctions, and Interjections.

近代初頭には、クワッケンボスの英文典が大学南校(東京大学)で、ピネオの英文典が慶應義塾で用いられ、英文の文典そのものに対して、直訳(いわゆる翻訳)、独案内・

独学(英文の単語ごとに訳を充て語順を示す)などの、要するにアンチヨコ本が数多く出版されることになる。

クワッケンボスの G.P. Quackenbos "First book in English Grammar" (東京版 明治十五年(一八八二))では、次の九品詞が挙げられている。

How many parts of speech are there? Nine. Name them. Nouns, Pronouns, Articles, Adjectives, Verbs, Adverbs, Prepositions, Conjunctions, and Interjections.

格賢勃斯(訳者不詳)『英文典直訳』(明治三年(一八七〇))によってその訳語を確認すると、すでに現代のものほとんど同じであることがわかる。

話ノ幾許ノ部分ガ其処ニアルカ 九ツガ 彼等ヲ挙ゲヨ 名詞、代名詞、冠詞、形容詞、働詞、副詞、前置詞、接続詞及ビ間投詞ナリ 8ウ

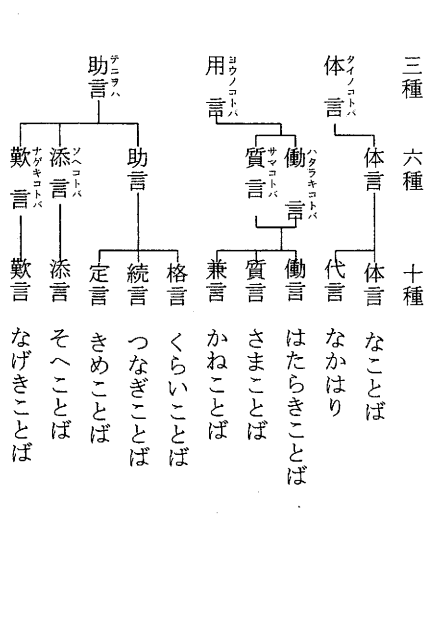
T.S. Pineo "Pineo's Primary Grammar of the English Language for Beginners" の翻刻である『ピネオ氏原板英文典』(明治三年(一八七〇)九月)は、品詞分類に関する説明はほとんどなく、いきなり名詞から章が始まるが、章立てから、The Noun, The Pronoun, The Adjective, The Verb, The Adverb, The Preposition, The Conjunction, The Interjection といふ八品詞が立てられていたことがわかる(クワッケンボスと比べると、冠詞が欠けている)。

以上のように、国学系の品詞分類は三ないし四に分け、

洋学系の品詞分類は八ないし九に分けるのが通例である。さて、このような状況の中で、近代の日本語文典はどのような品詞分類を採用したのだろうか。

古川正雄『絵入智慧の環』一編下(明治三年(一八七〇)九月)では、なことは(名詞ともいふ)・かへことは(代名詞ともいふ)・さまことは(形容詞ともいふ)・はたらきことば(動詞ともいふ)・そひことば(副詞ともいふ)・あとことば(後詞ともいふ)・つなぎことば(接続詞ともいふ)・なげきことば(歎息詞ともいふ)の八品詞を挙げる。ちなみに「あとことば」とは(格)助詞のことである。

西周『日本語典』(明治三年(一八七〇))は、稿本であるが、以下のような品詞分類が図示されている。ここで、「兼言かねことば」とはもとは動詞・形容詞であるが、名詞を修飾する連体修飾語として用いられたもの、また、「格言くらしいことば」は格助詞、「続言つなぎことば」は接続助詞、「定言きめことば」は係助詞のことで、「添言そへことば」「歎言なげきことば」は説明がないが、それぞれ副助詞・終助詞のことであろう。国学由来の体言・用言・テニヲハの三分類と、洋学由来の品詞(特に「兼言」を設定することなどに伺える)とを上位概念・下位概念として折衷しようとしていることがわかる。



中金正衡『大倭語学手引草』前編(明治四年(一八七二)九月)では、実名詞(体言)・代名詞・形容詞・動詞(用言)・はたらき言葉)・分詞・副詞・後置詞・接続詞・感嘆詞(投間詞)の九品詞を挙げています。

黒川真頼『日本文典大意』(明治五年(一八七二)三月)では、「詞は、原三品にして、それがわかれて九品となりて、さまざまの用をなすものなり、さまざまの用をなすことは、九品うちあはねばなさず、されど、その原は三品なれば、此の三品を、よく意得れば、それがうち合ひ或はわかれて九品となることも、悟らるゝなり、三品とは、名詞動詞助詞なり」と断って、名詞・数量詞・代名詞・助詞・形容詞・動詞・副詞・接続詞・投入詞が順に章立てて論じられる。

ちなみに、助動詞（および敬語）は「法末助詞」として、助詞の分類に入れられている。また『日本小文典』（明治五年（一八七二）十月）では、名詞（又体言）・数量詞・代名詞・助詞（又てにをは）・動詞（又用言、又作用言）・係詞・形容詞（又形状言）・副詞・接続詞・間投詞の十品詞としてゐる。さらに、『皇国文典初歩』（明治六年（一八七三）一〇月）は、『日本文典初歩』『日本文章法初歩』（ともに明治六年（一八七三）五月）を合冊したもののようで、そこには『日本文典大意』の冒頭の一節がそのまま引かれ、名詞・数量詞・代名詞・形容詞・動詞・助詞・副詞・接続詞・嗟歎詞という九品詞が順に論じられている。これは、国学系の体言・用言・テニヲハの三分類と、洋学系の九品詞が組み合わされたものと思われる。

太田随軒『太田氏会話編』巻二（明治六年（一八七三）八月）では、冒頭で「凡人の平生はなすところの詞は八種の別あり」と述べ、名詞・代名詞・形容詞・動詞・副詞・前詞・接続詞・間投詞を挙げる。ここで前詞とは（格）助詞のことである。日本語では格助詞はむしろ名詞の後に接続するが、英語の前置詞に対応するものとして、この呼称を用いているものと思われる。

高田義甫・西野古海『皇国文法階梯』（明治六年（一八七三）八月）では、「児童まづ、此体・用・の二を心得べし、体言とは活用かぬ物をいふ、用言とは活用く詞をいふ、各

四種あり」として、名詞と動詞とをさらに四つに細分化するが、その後、受辞（助動詞）について触れている。前後の文典からすると、珍しく国学系の分類が採用されている。山田俊三『山田氏文法書』（明治六年（一八七三）一〇月）では、「八品詞のなをいちくはなせよ。名詞・代詞・様詞・働詞・副詞・後詞・接詞・歎詞」と、八品詞を立てている。

馬場辰猪『日本文典初歩』（明治六年（一八七三）は、ロンドンにおいて英語で出版されたものではあるが、*Words are divided into eight classes, that is, parts of speech — Nouns, Adjectives, Pronouns, Verbs, Adverbs, Prepositions, Conjunctions, and Interjections.*）日本の多くのものと同じく、八品詞を立てている。

渡辺約郎『皇国小文典』（明治七年（一八七四）四月）では、体言即ち実名詞・代名詞・数詞・形容詞・用言乃ち動詞・副詞・接続詞・間投詞の八品詞が挙げられている。ここには助詞・助動詞が挙げられていないが、（格）助詞は、「各ノ名詞ハ、四ノ格ヲ有ス、即チガノニヲ是レナリ、」というように、名詞の格変化と扱われ、助動詞も動詞の変化と扱われ、受身は「打チカケ詞」（能動態）と対になる「受ケ身詞」として、過去（キ）、推量（アラフ）は「時ノ動詞」の中で過去、去、未、来として挙げられている。

近代初期の代表的な洋風文典である田中義廉『小学日本

『文典』は『訳和蘭文語』を下敷きとし、同じく中根淑『日本文典』は『英吉利文典』を下敷きとしていることは、すでに明らかにされているが、これまで見てきたように、それ以前のほとんどの近代初期の文典は、少なくとも品詞分類に関しては、洋学系の八ないし九分類を採用している。

その事情は、田中義廉『小学日本文典』（明治七年（一八七四）一月）でも同じである。

詞は、萬物にわたりて、其数極りなしと云へども、これを約して七種とす。名詞又ナコトバ○形容詞又サマコトバ○代名詞又カハリコトバ○動詞又ハタラキコトバ○副詞又ソヘコトバ○接続詞又ツギコトバ○感詞又ナゲキコトバなり

卷二一オ・ウ

中根淑『日本文典』（明治九年（一八七六）三月）も次のように記す。

○言語論ハ、言語ノ本質ト変化トヲ論ズル者ニテ、之ヲ大別シテ八種トス曰ハク名詞、曰ハク代名詞、曰ハク形容詞、曰ハク動詞、曰ハク副詞、曰ハク後詞、曰ハク接続詞、曰ハク感歎詞、則之ヲ総称シテ八品詞ト云フ、

卷上27オ

しかるに、本稿で問題にしたいいわゆる推量助動詞については、そもそも当時の洋文典には対応するカテゴリーが見出しがたい。現代の英文法でこそ、推量は、認識的モダリティ epistemic modality ないし義務的モダリティ deontic

modality と呼ばれて、法 modality の中心的な研究分野であるが、当時は、第3節に見るように、法 mood の分野には含まれていなかった。

このように、洋文典の品詞分類の枠組を採用すれば、一方では、三ないし四にしか分けられない国文学系の文典よりも単語の分類が精密になる反面、助詞・助動詞、特に助動詞に関しては適当なカテゴリーが見出しがたい、という弊も生ずることになる（格）助詞はかろうじて前置詞に相当すると考えることができる）。したがって、近代初期の洋文典を範とした洋風文典には、いわゆる推量助動詞について、ほとんど積極的に触れた記述が見られない。

しかるに、物集高見『初学日本文典』（明治十一年（一八七八）七月）は、『訳和蘭文語』を下敷きにしたと言われているが、それにも拘わらず、助詞・助動詞に関する記述がそれまでになく詳細である。これは、物集高見が元来、漢学、国学の素養を持った研究者であったこととも関わっているだろう。すなわち、「接辞」（助詞・助動詞を含む）を、嘆辞・希求辞・命令辞・禁止辞・指示辞・現在辞・過去辞・将来辞・否不辭・疑辭・反辭・兩辭・分量辭・想像辭・決定辭・比准辭・助辭・句頭接辭・一種接辭・崇敬辭に分類する。そのうち、現在辞にはナリ、過去辞にケム（「想像過去時ヲ見ス者トス」）、将来辞にはム・マシ、否不辭にはジ、想像辞にはラシ・ラム・メリ・マジ、決定辞にはベシ



が含まれる。

以上見てきたように、近代初期の品詞分類は、全体としては分類が詳細である洋文典の枠組が採用されているが、洋文典には対応物が見出しがたい助詞・助動詞、特に本稿のテーマであるいわゆる推量助動詞に関しては、国学系の研究が取り入れられている可能性があることを確認した。

ここで、文を単語に切り出し、そこで析出された単語をすべて有限のカテゴリに分類させるという志向は、いかにも近代的な発想であることに思い当たる。それが第一段階としては、品詞という形で八ないし九のカテゴリが用意されていたが、第二段階としては、それぞれの品詞がさらに下位のカテゴリに分類されることになる。洋文典にも共通する名詞や動詞などは、最初から第二段階のカテゴリが用意されていたが、日本語に特殊な後詞ないし助辞、すなわち助詞・助動詞は、洋文典のカテゴリをそのまま日本語に適用していた洋風文典の段階ではほとんど手つかずの状態で、本稿で問題にしているいわゆる推量助動詞も含めた助動詞のカテゴリ化は、明治十年代に入ってから、折衷文典と呼ばれるものによって行われたように思われる。これまで、助動詞のカテゴリ化には、むしろ国学系の研究の影響が大きいのではないかと示唆したが、それともう一つ、辞書の編纂の必要性が大きく関わっているのではないだろうか。実際、明治十一年に詳細な助詞・助動詞の

分析・分類を行っている、すでに挙げた、物集高見をはじめ、日本語文法に助動詞のカテゴリ化を定着させた大槻文彦も辞書の編纂に深く関わっている。

すべてを列挙してそれを一貫した基準で分類するという作業を、言語に適用した最たるものが辞書であるが、その前提として最低限の文法を必要とする。特に日本語の場合、まず文をどのように区切って単語と認定するかという問題があり、そのようにして析出された単語を有限個の品詞に矛盾なくすべて分類し尽くされなければならない。そのような試みとして、明治初頭には文部省主導で辞書『語彙』のための文法的な整理として、『語彙別記』（明治四年（一八七二）十一月以降）ならびに『語彙活語指掌』（明治四年（一八七二）十一月以降）が国学派を中心に複数回刊行されたが、国学派の文法では近代的な辞書を支えるに足るだけの理論的枠組を提供することはできず、頓挫する。その後、物集高見が辞書『ことばのはやし』（明治二十一年（一八八八）七月）を編集するにあたって、巻頭に文法的な枠組である『日本小文典』（明治十六年（一八八三）十一月脱稿）が置かれたり、近藤真琴が辞書『ことばのその』（明治十八年（一八八五）九月）を編集するにあたって、巻頭に文法的枠組である『はじめのまき』が置かれるという例もあったが（近藤真琴の『はじめのまき』は大槻文彦の『語法指南』の草稿を下敷きにしたと言われる）、何と云っても

近代的な辞書の筆頭は大槻文彦の『言海』（明治二十二年（一八八九）五月〜二十四年（一八九一）四月）であり、それが成功したのは『言海』の冒頭に置かれた文法解説『語法指南』（単行本は明治二十三年（一八九〇）十一月）が近代的な文典となり得ていたからであると考えられる。『語法指南』はその後、独立した文法教科書『広日本文典』（明治三十年（一八九七）一月）として学校教育にも用いられるが、そのことも『広日本文典』が近代的な文法の要求を満たしていたことを示唆している。

ちなみに、物集高見『日本小文典』には「言語」という節の冒頭に以下のように記す。

言語とは、事物の名、及び、事物の、動作、形容等を、声音をもて、表はすものをいふ。日本の言語は、形の上よりいへば、語尾の、動かぬものと、動くものと、他の語に附属する、短きものと、三種ありて、語尾の動かぬを、体言といひ、動くを用言といひ、他の語に附属するを、三爾乎波といふ。また、性質の上よりいへば、名ことば、かへ詞、わざ詞、さま詞、そへ詞、つなぎ詞、なげき詞、てにをはと、名づけらるゝ、八種のものあり、今は、其八種のものをいふなり。 12

そのうち、てにをはは「すゑ辞（助詞）」と「たすけ辞（助動詞）」とに分けられるが、たすけ辞はさらに七種類に細分化され、いわゆる推量助動詞は「第二 未来を表はすに、

用ふるもの」にム・マシ、「第三 現在の想像をいふに、用ふるもの」にメリ・ラム・ラシ、「第四 過去の想像をいふに、用ふるもの」にケム、「第六 決定の未来、即ち、半決定をいふに用ふるもの」にベシ、「第七 第六の辞の、うけしに、用ふるもの」にマジが挙げられている。

近藤真琴『はじめのまき』の「ことば」という節の冒頭は、以下のようになっている。

こゑのあやによりてものな、そのわざ、ありさま、ことのおもむきなどをあらはすことばといふ、ことばはそのかずおびただしといへども三くさのほかにいわず「一」なことば「二」はたらきことば「三」をいふと はたらきことばはまたわざことば・さまことばの二くさにわかち、をごととはてにをは・つなぎことば・そへことば・なげきことばの四くさにわかち

12オ・ウ

このうち、「なことば」は名詞、「はたらきことば」は動詞・形容詞、「をごと」は助詞（要するに、国学の体言・用言・テニヲハ）におよそあたるが、助動詞は、そのうち「はたらきことば」の中の「すけことば」として挙げられている。そのうち、いわゆる推量助動詞は、「二 こんときのすけことばはむといふひとことなり」とムが、「三 あらましのすけことばはまのあたりにはかくあらぬことをかくあらましとおしはかりていふことばなり、さればまたおしは

かりのすけことばともいふなり、あらましのすけことばはらん、らし、めり、けん、てん、なん、まし、べしの八つなり」とラム・ラシ・メリ・ケム・マシ・ベシが、「四らうへのすけことばはそのわざことばのころをうらうへになすものなり、まうちけしのすけことばともいふ、ずといふひとことなり、またうらうへなるべしとおしはかるものはじ、まじのふたつあり、これをあらましのうらうへといふ」とジ・マジが、「七ながめのすけことばはかんずることあるときにいひいづることばにてなりといふひとことなり」とナリが挙げられている。

さらに、大槻文彦『語法指南』の「言語」という節の冒頭は以下のようになっている。

此篇ニハ、八品詞ノ目ヲ、名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接続詞、天爾遠波、感動詞、ト立テタリ。

9

第二、三、四節にも述べるように、指定ノ助動詞にベシが、打消ノ助動詞にマジ・ジが、未来ノ助動詞にムが、過去ノ助動詞にケムが、推量ノ助動詞にラム・メリ・マシ・ラシが、詠歎ノ助動詞にナリが挙げられている。

このように、品詞分類が第二段階として、助動詞の内部にまで適用されるにあつては、辞書の編纂が深く関わっているものと推測される。近代の辞書は、すべての語彙を何らかのカテゴリーに分類する必要があるわけだが、助動

詞を単に「助動詞」とひとくくりにするには、日本語の助動詞は実にさまざまな働きをする。そこで、助動詞という第一段階の品詞分類の上に、さらに助動詞の種類という第二段階の品詞分類が要求されたと考えられるわけである。

ただ、厳密を期せば、同じ明治十年代に、高知師範学校の教科書として、溝淵幸雄『言葉の橋立』（明治十二年（一八七九）十月）が出版されている。ここでは「詞ノ種類ハ甚だ繁雜ナル者ニハアレド皇国ニテハ常ニ体言用言テニヲハノ三部ニ大別セリ」、また「用言ハ動作作用言形状用言ノ二類ニ區別シ」というように、国学系の品詞分類を行っているが、そのうちテニヲハに関しては、「コトニハ其言ノ意ヲモテコレヲ分クベシソハ時限ノテニヲハ歎息ノテニヲハ疑問ノテニヲハ反語ノテニヲハ希望ノテニヲハ命令ノテニヲハ想像ノテニヲハ不意ノテニヲハ発語ノテニヲハ助語ノテニヲハ形容ノテニヲハ雑ノテニヲハ等ナリ」のように分類している。いわゆる推量助動詞は、時限ノテニヲハのうち過去にケム、未来にラム・ム・ベシ・マシ、命令ノテニヲハにベシ、想像ノテニヲハにラム・ラシ・ベシ・マジ・メリ、不意ノテニヲハにジが挙げられている。これもかえって、国学系の文典は助詞・助動詞に詳しいということの証左になるのではなからうか。

このように、助動詞をさらに分類しようという発想は、洋学系の文典をそのまま日本語に適用しただけでは生じて

こない。一方では、テニヲハの働きに注目してきた国学系の語学研究がそれに接ぎ木された結果、また他方では、辞書を編集するための文法的整備、すなわち洋学的な発想による近代的な辞書を作る必要上、明治十年代にカテゴリーが助動詞の中にまで及んだと思われる。

## 2 未来—テンス—

明治初期の文典を通観するに、助動詞の意味記述ないし分類における最も強力な概念として、時制概念が用いられていることに気が付く。過去・完了助動詞に時制概念が適用されることは当然とも思われるが、いわゆる推量助動詞にも時制概念が大きく関わっている。なぜ推量助動詞に時制概念が適用されるようになったのか、その経緯を明らかにしたい。

国学の語学研究の中にも時間概念が見出されないわけではない。そもそも、過去・現在・未来という術語ないし概念は、仏教用語として導入され、それが中世に歌学に流入し、さらに近世になると国学に受け継がれる。

近世初期、『一步』（著者不明）は、早くも助動詞（および一部の助詞）を過去・現在・未来によって分ける試みを行っている。「過去の手爾於葉」としてキ・ツ・ヌ・タリ・タなど、「現在の手爾於葉」としてナリ・メリ・ラン・ケリ

など、「未来の手爾於葉」としてム・マシ・ベシ・ジ・タシなどが挙げられている。時間関係という単一基準によってこれらの助動詞を分類しようとするのは強引すぎるようにも思われるが、実は近代の文典の中にも、極端なものとは、同じように時制のみによって推量助動詞を分類しようとするものがあり、その発想の共通性に驚かされる。

富士谷成章『あゆひ抄』（安永七年（一七七八））では、過去・完了助動詞について、キが、「過ぎたる事を確かに定めて言ふ言葉なり。」、又が、「いぬ」といふ事をつづめて言へる脚結なり。「いぬ」とはここを去りてかしこにゆくを言ふ言葉なり。脚結にてもこの心を思ひわたすべし。したしくいはば、さはあるがたからんとおぼゆる事の終に成りたるやうの心なり。里「テシマフ」「ダンニナル」「ヤウニナル」、また所によりては「テシマフタ」「ヤウニナツタ」と「タ」文字を加へても心得べし。」と説明されるのは当然として、いわゆる推量助動詞に関しても、ムは、「未だ然あらぬ事をはかりあらまして言ふ言葉なり。みづから思ひ立ちて「いま行かむ」「いざ帰らむ」など言ふは裏なり。思ひやりて「とあらむ」「かからむ」など言ふは表なり。みな今より後をはかり、ここよりかしこをはかれる心なり。」と説明され、また「タデアラウ」と言ふ。過ぎたる事を思ひて「ける」なども詠むべき所を、我まさしく見ず・聞かず・

知らずなどあれば、寛<sup>くわん</sup>げて「む」とひびかせり。」と説明されており、推量される命題内容がムは未来のもの、ケムは過去のものという認識があつたことがわかる。

幕末になつても、橘守部『助辞本義一覽』（天保六年（一八三五））では、過去・完了助動詞に関しては、キについて、「此きは、既<sup>ツキ</sup>の義也。」ありきは、在既<sup>アリツキ</sup>。「見きは、見既<sup>ミツキ</sup>。」ききは、聞既<sup>キツキ</sup>。「しりきは、知既<sup>シリツキ</sup>の意にて、即在既<sup>ミツキ</sup>、聞既<sup>キツキ</sup>、知既<sup>シリツキ</sup>といはんほどの心ばへなり。中段のしは、去<sup>サ</sup>の義也。」「ケリについて、「此けり、ける、ければ、往來<sup>ユキキ</sup>などの、來<sup>キ</sup>の言の活きたる辞也。」、又について、「此ぬは、所謂畢<sup>ツキ</sup>のぬにて、往<sup>イヌ</sup>の義也。されば「なりぬは、成往<sup>ナリヌ</sup>」、「たえぬは、絶往<sup>タエヌ</sup>」、「しりぬは、知往<sup>シリヌ</sup>」、「きぬは、來往<sup>キヌ</sup>」、「まどひぬは、惑往<sup>マドヒヌ</sup>也。」「ツについて、「此つは、竟<sup>ツ</sup>の義にて、「見つは、見竟<sup>ミツ</sup>」、「きつは、聞竟<sup>キツ</sup>、「いひつは、言竟<sup>イヒツ</sup>、「おもひつは、思竟<sup>オモヒツ</sup>、「くらしつは、暮竟<sup>クツ</sup>、「なかりつは、無在竟<sup>ナラアツ</sup>の意也。」「と説明されているように、語源的な色彩は強いものの、「既く」「去る」「來」「畢んぬ」「往ぬ」「竟つ」のような、移動や終了の動詞と結びつけて過去・完了的な意味合いを推測させている一方、いわゆる推量助動詞に関しては、ケムの説明に、「さればむも、まくも、共に過去にも、未來にも、其事の未<sup>メ</sup>目前に、頭は來<sup>キ</sup>來<sup>キ</sup>らざるにいふ辞也。」「という指摘も見られる。その他、鈴木重胤『詞捷徑』（弘化二年（一八四五））では、キヤムに関しては、先に挙げた『あゆひ抄』の一節

を引くが、ケムについては、「さて此けんのけは、既<sup>ツキ</sup>の義なり、と、或人のいへる如く、すぎたる事をたしかにいふことばなるが、それにんのそはりて過去をうたがひておしはかることばなり。」と説明する。さらに、黒沢翁鷹『言靈のしるべ』（安政三年（一八五六））には、ムについて、「んは総<sup>ソウ</sup>て未來の事をいふ時に用うる辞也」<sup>テヲハナリ</sup>、ケムについて、「けんは過去し事を疑ひ云辞なり」と、対比的に説明されている。

このように、確かに、本居宣長『詞玉緒』の系統を引く研究にはそもそも意味に関わる記述が少なく、助動詞の意味記述の中に時間に関わる一節を見出すことは困難であるが、富士谷成章『あゆひ抄』の系統を引く研究や、その他のものには、時間に関わる意味記述が散見され、近世においても、過去・完了助動詞ばかりでなく、いわゆる推量助動詞の意味のある部分は時間に関わるものであると認識されていたことが了解される。

しかし他方で、洋学の語学研究において、時制は、文法記述において、性と数、自動と他動、態、法と並ぶ代表的な概念である。しかもその際、かならず現在・過去・未來が組になつて論じられる。

蘭語学において、物集高見の『初学日本字典』や『日本小辞典』に直接影響を与えたと言われる大庭雪斎『訳和蘭文語』（安政二年（一八五六））では、時制を以下のように

記述している。ちなみに、現代の英文法の術語を宛てれば、「方今時」は現在形、「帯既往時」は過去進行形、「既往時」は過去形、「過既往時」は過去完了形、「将来時」は未来形にあたる。

方今時【テーゲンウオールヂヘテイド】ハ、説話スル事其説話スル時刻ト瞬間ニ在ルコトヲ示ス者ナリ。

帯既往時【オンホルマークトフルレーデンテイド】不滿既往時ノ義又タ「ベトレッケルイケフルレーデンテイド」ト云此原名ニ本ツヒテ帯既往時トス」ハ、猶方今時ノ如ク、活辞体ノ変ヲ以テ成ル者ニシテ、説話スル事、其説話ノ時ヲ過去トモ、尚ヲ其説話スル時刻ニ継続シ、他事ノ始マル時ニ、未タ全ク過去リ了ラサル業作ヲ示ス者ナリ。

既往時【フォルマーキトフルレーデンテイド】ハ他ノ時刻、若クハ他ノ業作ヲ目スルコトナク、説話スル時ニハ、全ク過去リ了レル事ヲ示ス者ナリ。

過既往時【メールダンフォルマーキトフルレーデンテイド】ハ、他事ノ始リタル比ヒニ、既ニ全ク過去リ了リシ事ヲ示ス者ナリ。

将来時【ツーカーメンデテイド】ハ、事ノ將ニ成ントスルヲ示ス者ナリ。

さらについでながら、割注の中で、古典語のいわゆる推

量助動詞についても触れている。

【助辞「シュルレン」「ソウデ」ハ、本邦ノ「ラム」「ケム」「ナム」「ラメ」「ケメ」「ナメ」ノ類ニ当リ、支那ノ助辞矣ニ当ル、故ニ俗言ノ「デアラウ」「デモアラウ」ト云助辞ニ当ル。】 同 35才

また時代は遡るが、蘭語学の枠組で日本語を記述したものととして、鶴峯戊申『語学新書』（天保四年（一八三三））が現われる。そこではすでに、いわゆる推量助動詞について、メリ・ラン・ベシ・ラシを現在、ケムを過去、ム・マジ・マジを未来と時制によって分類している。

○現在格第七

聞くといふ詞にていはず、まづ聞くといふは現在用言なれども欠助辞也。次に聞くといふ詞に、現在格の助辞をつけてきくめりきくらんきくべききくらしといへば、完助辞の詞となる也。これを現在格とはいふなり。

○過去格第八

動かしたなびかれをりなどいふはたゞ全過用言也。動かしてたなびかれてをりなどいふは、全過格のてもじ全過用言をうけたる也。またそのにて同格の助辞けり等をつけて、動かしてけりたなびかれてけりをりてけりなどいへり。（中略）次になぬなばなんなめなましねにしにきにけりにけらしぬぬる

ぬれなどは去ノ字の意にてやがて万葉にはこれらの助辞に去ノ字をかけり。次にしきけりけるけれけんけめけらしは来ノ字の意なるべし。

○未 来 格 第 九

此未来格の現在過去の二格と異なるよしは、かの二格は、上の用言下の助辞なくとも、みづから語をなしてきくききけなどとはたらくを、この未来格は、上の用言に、下の助辞をつけてきかんきかましなどはなれば、語をなさぬ也。なほ漢語にて、不ノ字輝ノ字などをそへていふ語のいとし。この未来格にてても不ノ字輝ノ字の意也。ずでじ不ノぬは不ノ字の意也。ではスシテノ反ゼなるを転じてでといふ也。まじはじに同じなくなくなどは不ノぬに同じ。

英学に目を転じれば、幕末には『英吉利文典』(第五版 慶応二年(一八六六))の影響は大きい。本書は、中根淑『日本文典』の典拠であり、また、大槻文彦『広日本文典』も大きく影響を蒙っている。大槻自身が述べている。そこへは、過去 (the past tense) 、現在 (the present tense) 、未来 (the future tense) とごう時制 (tense) と、-ing を用いる非完了 (= 進行 imperfect) あるいは能動 (active) と ed を用いる完了 (perfect) あるいは受動 (passive) という分詞 (participle) との組み合わせとして表現の体系が論じられている。見てわかる通り、分詞という概念にはアスペク

トとヴォイスとが混在している。とにかく、この二つの枠組を掛け合わせると、present imperfect (現在進行形) 、past imperfect (過去進行形) 、future imperfect (未来進行形) 、present perfect (現在完了形) 、past perfect (過去完了形) 、future perfect (未来完了形) (括弧内は現代英文法の術語) という六つの形が導かれる (本書は問答形式で進められるが、答の部分のみを抜き出して示す)。

The present tense imperfect shews an action going on at this present time, but not finished; as — I am advising you now.

The past imperfect shews an action past, but not finished at the time spoken of; as — I was advising you yesterday.

The future tense imperfect shews a future action that will not be finished at the time spoken of; as — I shall be advising you to-morrow.

The present tense perfect shews an action finished, but still in effect existing; as — I have advised you now.

The past perfect expresses an action as finished some time ago; as — I had advised you before yesterday.

The future tense perfect declares that an action will be finished at some future time; as — I shall have advised you before this time to-morrow.

38・39

以上に挙げたような蘭文典、英文典は、語学研究書として編集・受容されたわけではなく、語学学習書として編集

・受容されたものと思われるが、そのような事情は近代に入って英語教育が大学教育に組み込まれてからも受け継がれる。近代初期には、クワッケンボスやピネオの英文典が広く用いられるが、それらが、近代初期の語学的な認識を形成することに寄与したと考えられる。

クワッケンボスの G.P. Quackenbos "First book in English Grammar" (東京版 明治十五年 (一八八二)) によると、  
時制をまず以下のように定義する (この書も問答形式をとっているが、答の部分のみを抜き出す)。

Tense is that property of the verb which distinguishes the time for what it affirms. 55

そして後に見る直説法 (indicative mood) の文の中には、次の六つのテンスが区別されるといふ。

The Indicative Mood has six tenses; the Present, the Imperfect, the Perfect, the Pluperfect, the First Future, and the Second Future. 55

(この部分を、格賢勃斯 (訳者不詳) 『英文典直訳』 (明治三年 (一八七〇)) から抜き出すと、以下のような訳語が充てられている。それ以後に出られるいくつかの版の『英文典直訳』もこの訳語を踏襲している)。

直説法ハ六ノ時ヲ持ツ、現在、半過去、過去、大過去、第一未来及ビ第二未来ナリ

上 57 才

それぞれの具体的説明、及び例を見ると、present「現在」は現在形、imperfect「半過去」は過去形、perfect「過去」は現在完了形、pluperfect「大過去」は過去完了形、first future「第一未来」は未来形、second future「第二過去」は未来完了形 (術語は現代英文法) にあたるといふのである。原文の方も、過去形を imperfect、現在完了形を perfect とするなど、一貫性に欠け、整理が不十分であるように思われるが、訳語も、まだ「完了」という概念がなかったためでもあろうが、(過去完了形を「大過去」と呼ぶのはまだしも) 過去形を「半過去」、現在完了形を「過去」と呼ぶなど、反って混乱しそうな表現を用いている。

The Indicative Present affirms that an action is taking place, or a state existing, at the present time; as, *I depart, I am.*  
The Indicative Imperfect affirms that an action took place, or a state existed, at some past time; as, *I departed, I was.*  
The Indicative Perfect affirms a past action or state as completed at the present time; as, *I have departed, I have been.*

The Indicative Pluperfect affirms a past action or state as completed at or before some other past time; as, *I had departed, I had been.*

The Indicative First Future affirms that an action is about to take place, or a state to exist; as *I shall depart, I shall be.*



The Indicative Second Future affirms a future action or state as about to be completed at or before some other future time; as, *I shall have departed, I shall have been.*

55・56

次に、『ピネヲ氏原板英文典』（明治三年（一八七〇）九月）は、クワツケンボスの英文典と比較すると、時制の説  
明がすっきりしているように見える（これも問答形式であるが、問の部分は省略する）。まず、時制を次のように定義  
する。

The word *tense* means *time*.

The tense of verbs denote the time in which an action or state of being is represented; as,

'I study,' (now):

'I studied,' (yesterday, or in some past time):

'I shall study,' (to-morrow, or at some future time).

その上へ、第二段階として、時制を過去・現在・未来の  
三つに分ける。

There are three principal divisions of time: the present, the past, the future.

The Present Tense, denoting present time:

The Past Tenses, denoting time past: and

The Future Tenses, denoting time to come.

ゆゑに第二段階として、過去を三つに分

けるが、以下の説明を見てみると、現代の英文法の術語で  
は、過去に「して」、*first past* は過去形、*second past* は現在  
完了形、*third past* は過去完了形、未来について、*first future*  
は未来形、*second future* は未来完了形にあたる。現代英文  
法の観点からすると、時制を三つに分ける点はやいが、現  
在完了形を *second past* と呼んだり、また進行形の位置付け  
が明らかでなかったりと、アスペクトに関する配慮が充分  
ではない。

The First Past Tense denotes time past, without reference to any particular portion of it; as, 'He studied,' (yesterday, or last week, or many years since), or it represents an action or event as going on at a certain time past; as, 'He was studying when the bell rang.'

The Second Past Tense denotes a past time completed at the present time; as, 'I have studied,' (that is, at this moment, the studying is done), 'I have written,' (at this time the writing is completed).

The Third Past Tense denotes a past time, previous to some other past time referred to; as, 'I had studied,' (before I was called on), 'I had written,' (before I saw you).

The First Future Tense denotes time to come, without reference to any particular portion of it; as, 'I shall study,' 'He will write.'

The Second Future Tense denotes a future time, which is before some other future time; as, 'I shall have studied my lesson,' (before or when he shall arrive).

若干時代は下るが、栗野忠雄訳『英文典直訳』（明治二十年（一八八七）八月）の訳語を確認してみると、まず過去については「其処ニ三ツノ過去ガアル、第一ノ過去、第二ノ過去、及ビ第三ノ過去ナリ」また、未来については「其処ニ第一未来及ビ第二未来ト呼バレタルニツノ未来ガアル」と、ほぼ原語そのままの訳語を充てている。

このような幕末・明治初期の状況の中から出発した近代の日本語文法学は、時制概念をどこから取り入れたのだろうか。結論を先に言えば、それは洋文典から取り入れたということであろう。すでに見たように、近代初期の文典は、その理論的枠組を蘭文典や英文典から受け入れて、その是に指摘されているが、時制もその枠組の中に組み込まれているのである。そしてその中では、時制は動詞の機能の一つと位置付けられており、またそれには、現在・過去・未来がひとまとまりとなつて論じられている。近代初期の洋風文典では、まさにそのように論じられているのである。

古川正雄『絵入智慧の環』四編下（明治五年（一八七二）五月）では、「はたらきことば（動詞）」の章の中に「たすけことば（助動詞）」に関する記述が含まれているが、そこ

で時制が論じられている。このことは、時制を文型が担うというよりは、助動詞が担っているという了解があつたのであろう。さて、「はたらきことばのとき」を「めのまへのとき（現在）」「こしかたのとき（過去）」「ゆくさきのとき（未来）」に三分して、過去については、「いまよりまへにをはりしはたらきをいふときを第一の過去となづけ、いまをはれるはたらきをいふときを第二の過去となづけ、こゝにこれをわかちするすべし」として、第一の過去の例に「よみき・よみにき・よみけり・よみにけり」が挙げられ、第二の過去の例に「よめり・よみぬ・よみつ・よみたり」が挙げられている。未来については、「いまよりのちのことをおしはかりてなにくするであらうとやうにいふを、第一の未来のはたらきことばとなづけ、いまよりまへのことをおしはかりてなにくしたであらうとやうにいふを第二の未来のはたらきことばとなづけて、こゝにこれをわかちするすべし」として、第一の未来の例に「よまむ・よむらん・よむべし」が挙げられ、第二の未来の例に「よみけん・よみぬらん・よみつらん」が挙げられている。

渡部約郎『皇国小文典』（明治七年（一八七四）四月）には、簡単ではあるが、以下のような記述がある。「時ノ動詞ニ三ノ分子アリ、即チ現在、過去、未来、是レナリ、次ギノ例ヲ見ヨ」として、それぞれ動詞の言い切り、動詞ナシ、動詞十デアアラフの例が挙げられ、さらに「未来中ニ過去ノ

詞、アリ、譬へバ忘レタデアラフ、忘レタハ過去ニシテ、デアラフハ未来ナリ」と言う。

さらに、洋風日本文典の最初期のものである、田中義廉『小学日本文典』（明治七年（一八七四）一月）の「動詞の時限（二時制）」の一節を、若干長めではあるが、まず抜き出して示す。

動詞の時限は、過去、現在、未来の三時なり。又これを小別して、第一現在、第二現在（一に半過去といふ）過去、第一未来、第二未来とす。

過去は、既往の時に方りて、なしたる動作を示すものなり、即 彼ハ前日他国ニ行キタリ 予ハ此事ヲ昨年告ゲラレタリ 等のごとし

第一現在は、現今動作する仕業を示すものなり。即 予ハ今行ク 彼ハ目今教ヘラレル 等の如し

第二現在、即半過去は、現今なしたる仕業の、漸く終りたる瞬間を示し、或は既になしたる仕業を、目今説話する時限を示すものなり、即 彼ハ今他国ニ行キシ 今年後ノ鐘ヲ撞チヌ 或は 先刻マデ予ハ教ヘラレシ 等のごとし。

此時限は、平常の説話に多くありて、且要用のものなれども、文章に於ては、特に過去と混じ易し。唯文章中、現在を示せる副詞【今】と、説話する時限の現今なるとに従て、其區別を定む。故に第一現在と、過

去との兩時限の、一和したるものと知るべし。

茲に挙げたるシは、元来キの転にして、過去を示す助動詞なれども、亦文意に従て、半過去ともなるものなれば、今暫くここに収む。

第一未来は、今より後に於て、作動せんとする仕業を示すものなり、即 明日此地へ来ルナラン 予ハ後日他国へ行カン 出デ行カン人ヲ止メム 等のごとし。

第二未来は将来の時限に於て、期すべき事を示し或は既に為したる敷を考察して、説示するに用うるものなり。即 彼ハ明日来ルデアラン 明日ハ此書ヲ讀ミ終ルコトモアルナラン 或は 行ク駒モ不破ノ関ヲバ越エツラン 明日ハ今時既ニ学校ニ到リテアラン 彼ハ最早彼地ニ到着シタルナラン 等の如し。【茲に越エツランは越ユテアランの約言なり】

卷三15ウゝ17オ

ここから読み取られることには、いくつかある。まずは、古田（一九五九・三）などに指摘されているように、『小学日本文典』は『訳和蘭文語』の編成、内容を下敷きにして成立したということである。しかし、本稿の関心は、“も”はそうであっても、それを日本語に適用したことによつて、日本語がどのように見えるのか、ということである。何よりここから読み取られることは、時制というものはいどのような助動詞が用いられるかではなく、文型、あるい

は文が作られるときの条件によって決定されるということである。(第二現在は) 文章に於ては、特に過去と混じ易し。唯文章中、現在を示せる副詞【今】と、説話する時限の現今なるとに従て、其區別を定む。あるいは、「茲に挙げたるシは、元来キの転にして、過去を示す助動詞なれども、亦文意に従て、半過去ともなるものなれば、今暫くここに収む。」という一節は、文末にキやヌを使うかどうかではなく、文が用いられる条件によって、過去か(第一)現在かが定まる、ということを主張している。ここには、文末に用いられた助動詞(キやヌ)によって、一義的に時制が定まるといふ後の時代の議論(「過去」の助動詞、「未来」の助動詞というような枠組)とは一線を画している。

しかし一方、その中に、「茲に挙げたるシは、元来キの転にして、過去を示す助動詞なれども」という一節が含まれているように、すでに(あるいは、国学的な発想が混入して)助動詞が時制を担っている、という発想が混在している。実は、「第二十八章 法」「第二十八章 時制」(このように、第二十八章が重複している)の前に、次のような「第二十七章 助動詞」という章が置かれていたが、『訳和蘭文語』あるいはそのもととなつた『和蘭文典』には、当然のことながら、そのような章は含まれていない。

此詞は、他の動詞と結合して、其詞をなせども、又独立して、意義をなすことあり。其他独立せずして、必

ず他の動詞と結合する助動詞は、ル【被】タ【タリ】の略【タリ】テアリ【テアリ】の約言【シ】キ【キ】の転【キ】ケリ【ケリ】の約言【ケリ】タリ【タリ】の転【ナリ】ニアリ【ニアリ】の約言【ヌ】去【去】の義にて半過去を示す詞なり、○否不を示す副詞の又とは全て異なり、ムンナラン【ムンナラン】ニアラン【ニアラン】の約言【アラ】以上四言皆未来を示す詞【ナリ】なり。

卷三・12オ・ウ

このことは、時制というものは、動詞の変化によつて担われるものか(洋学)、助動詞によつて担われるものか(国学)、という二つの異質な基準が、すでに初期の『小学日本文典』の段階から胚胎されていたことを示している。

それに続く、中根淑『日本文典』(明治九年(一八七六)三月)になると、助動詞の意味の中に時制を取り込もうとするようになる。そのような議論は、言うまでもなく、中根がもとにした『英吉利文典』には見られない。

○助動詞ハ、常ニ動詞ノ後ニ添フテ、以其ノ意味ノ足ラザル所ヲ助ケ成ス者ナリ、即・流サ・流レ・トノミ云ヒテハ、其ノ意味未充足セズ、若之ニ流サン・流レリ・ト、助動詞ヲ加フルトキハ、其ノ意味全ク充足ス、而其ノ語総ジテ精密ニ時ヲ顯スコトヲ主トス、時トハ、過去・現在・未来・ノ三時ヲ云フ、

下8ウ

○過去トハ、既過ギ往キタル時ヲ形スヲ云フ、其ノ中

充分ト不充分トノ別アリ、充分過去トハ、其ノ時全ク過ギ去リテ、今已遠キ前ノコトトナリタルヲ云フ、例ヘバ・古昔勸学院ヲ置カレシ・ノ如シ、不充分過去トハ、其ノ事前ニ在リト雖、未全ク過ギ去ラザル者ヲ云フ、例ヘバ・近日府県ニテ無数ノ小学校ヲ建テリ・ノ如シ、

○現在トハ、今為ス時ヲ形スヲ云フ、之ニ亦充分現在ト云フアリ、是ハ其ノ事今僅ニ終ルヲ云フ、例ヘバ・余地理書ヲ読ミ了リタリ・ノ如シ、其ノ充分現在ニ非ザル者ハ、今方ニ之ヲ為スヲ云フ、例ヘバ・余今歴史ヲ看ル・ノ如シ、

下9オ・ウ

ただし、単にテンスと位置付けているばかりではなく、説明の中には「斯克在ラント推量スル」ないし「未来ヲ察スル」というように、「推量」の意味合いがすでに初期の文典から含まれていることは注目すべきだろう。

○未来トハ、今ヨリ後ノ時ヲ、予形スヲ云フ、是亦充分ト不充分トノ別アリ、充分未来トハ、其ノ事全ク将来ニノミ在リテ、他ノ時ニ関涉セザルヲ云フ、即・余ハ明日平箒ヲ終ラン・ノ如シ、不充分未来トハ、其ノ事他ノ時ニ在リテモ、大方是ハ斯克在ラント推量スルコト、猶未来ヲ察スルガ如キ用フルヲ云フ、即・彼ハ比例ヲ学ビタラン・又ハ・早已点鼠ヲモ為シヌ

ベシ・等ノ如シ、

下9ウ

『日本文典』では、さらにその後で時制と助動詞とをさらに密接に結びつけようとしている。すなわち、過去や未来の場合には、必ず助動詞を用いなければならないが、現在の場合には、助動詞は必ずしも必要ではない（ただし、現代の目から見れば、現在の助動詞とは活用語尾のことである）。ここから、時制の意味は助動詞が担っているという認識までの逕庭は僅かである。

○過去ノ動詞ハ、必助動詞ヲ仮ルニ非ザレバ之ヲ言ヒ出ス事能ハズ、即飽キケリ・飽ケリ・約セリ・射ケル・着シ・等ノ如シ、

○現在ノ動詞ハ、助動詞ヲ仮ラザル者ト、助動詞ヲ仮ル者トノ二アリ、助動詞ヲ仮ラザル者トハ、総ベテ・飽キ・飽ク・飽ケ・約シ・約ス・約セ・ノ如ク、語末ヲ種々ニ変化シテモ、唯其ノ語ノミニテ、意味ノ足ル者ヲ云フ、单声ノ・附・隨ノ如キ語モ、意味足ルトキハ、別ニ助動詞ヲ用ヒザルナリ、助動詞ヲ仮ル者トハ・落ツル・試ムル・約スル・射レ・着ル・ノ如キ類ヲ云フナリ、

○未来ノ語モ、過去ト同ク、必助動詞ヲ仮ルニ非ザレバ、之ヲ言ヒ出スコト能ハズ、即・飽カシ・飽キヌベシ・約セン・射ラン・着シ・ノ類ナリ、

下11ウ・12ウ

このように、『日本文典』では、時制の意味は助動詞が担

つているといふ考え方に傾いてきているのであるが、いわゆる推量助動詞も時制の意味ごとに分けられており、下10ウ・11オの表によると、ム・マシ・メリ・ラム・ラシが充分未来に、ケムが不充分未来に挙げられている。また不成助動詞（打消助動詞）も時制によつて分けられており、ジ・マジを未来としている。さらに、ベシは分類は明示されていないが、「動詞ノ体ヲ具ヘタル助動詞アリ、之ヲ半助動詞ト云フ、即・可シ【可シニ三種アリ、一ハ命令ニ用フル者、即・取ルベシ・ノ如シ、又一ハ預許ス意ヲ形ス者、即・為シ得ベシ・ノ如シ、又一ハラシノ意ニ用フル者、即・氷モ解ケヌベシ・ノ如シ、】（以下略）」とあるところからすると、その用法の一つは充分未来であるということになる。だろうか。要するに、いわゆる推量助動詞はすべて時制、それも未来に分類されている。ただ、ここで注意しておきたいことは、前節でも見たように、まだ助動詞のカテゴリー化は行われておらず、充分未来の助動詞あるいは不充分未来の助動詞というカテゴリーがあるのではなく、個々の助動詞が時制の種類によつて分けられているにすぎない。

渡部栄八『詞のたつき』（明治八年（一八七五）四月）は、品詞を体言・用言・てにをはと分ける国学系の文典であるが、子供にわかりやすいようにと断つた上で、五十音図のアイウエオそれぞれの行について、「此五十音の右側にしるせる如く「ア」の横行は未来の詞「イ」の横行は過去の詞

「ウ」の横行は現在の詞「エ」の横行は下知の詞「オ」の横行は俗語なり」と述べ、未来について「さかん」といへば花さかんとおしはかりたる詞にて、即ち未来なり」と、未然形承接（ア行）のムについてのみ、未来であると指摘する。

安田敬齋『日本小学文典』（明治十年（一八七七）一月）は、洋文典の枠組を忠実に守り、「○助動詞トハ、動詞ノ、一種ニシテ、多ク動詞ノ、足ラザル所ヲ補ヒ、助ケ、文意ヲ、全タウ、セシムル、詞ナリ、」とするが、ここでいう助動詞は時制を担うものだけであり、表中に、ン・ナン・ランが充分未来、アラン・ナラン・タラン・ツランが不充分未来として挙げられている（ただ、法を議論する中では第一未来、第二未来と呼ばれている）。春山弟彦『小学科用日本文典』（明治十年（一八七七）二月）では、助動詞が使役・受身の助動詞と、時制の助動詞とに分けられており、未来助動詞にム・ラムが挙げられている。さらに、「問 第一未来とは 答 動詞にムメと転用する助動詞を加へて今より後に為さんとする動作をあらかじめいひあらはす者なり

学校にゆかば 算術をまなばん 等のことし」「問 第二未来は 答 これは未来のいきはへだりて其作動の景況を確定しがたくころもとなき時にいさゝか疑ひを含みていひ出づる時に用る者にして動詞の第一転にラムランラメと転用たる助動詞を加ふる者なりすなはち 吾はいつ故

郷へ帰らるらん 彼人はいま東京に至るらん 等の如し

と、ムを第一未来、ラムを第二未来と呼んでいる。さらに、

藤田維正・高橋富兄『日本文典問答』(明治十年(一八七七)

三月)でも、「問 動詞ノ時ハイカナルモノナリヤ 答 作

動ノ時ヲ言ヒ分クルモノニテ過去、半過去、現在、第一未

来、第二未来ノ五ツアリ」とするが、特に未来に関しては

「第一未来ハ後ニ作動セントスルヲ示スモノニテ即読マン

行カンノ類ナリ此詞ニハ第一階ニシテノ助動詞ヲ用キルナリ

第二未来ハ既ニ為シタルヲ考察シテ言フモノニテ即読ツラ

ン 読ミケンノ類ナリ」と論じる。物集高見『初学日本文典』

(明治十一年七月)にも、「活辞ノ時」という節が挙がって

おり、「時ハ説話ニ罹ル事ノ説話ヲ為ス時間ノ前後或ハ同時

ニ在ル者ヲ云フ而シテ其時ヲ分テ現在。過去。大過去。未

来。想像過去・ノ五時トス」とされている。ちなみに、未

来時はム、想像未来時はツラムの例が挙がっているが、後

者について「説話ニ罹ル事ノ説話ヲ為ス時ニハ已ニ過去ニ

属シタル可キヲ想像スルヲ示ス者トス」と説明されている。

ここで、里見義『雅俗文法便覧』(明治十年(一八七七)

八月)『雅俗文法』(明治十年(一八七七)十月)、谷千生『言

語構造式』(明治十七年(一八八四)一二月)、弘鴻『詞の

橋立』(明治十九年(一八八六)三月)などはいずれも国学

系の文典であり、表中に「将言」「将為」「将有」などの注

記があるので説明はない。これらは、洋文典の影響で「将

(未来)」という表現が用いられているわけではなからう。

明治二十年代になると、助動詞のカテゴリ化が一般化

するが、その後も稀にいわゆる推量助動詞すべてを時間的

に定義しようとする文典もなくなはない。高津敏三郎『日

中文典』(明治二十四年(一八九一)六月)では、助動詞を

「補助詞」と呼ぶが、未来をあらはす補助詞にム・ラム・

メリ・ラシ、願望をあらはす補助詞にマシ、過去の動作を

想像するに用ふる補助詞にケムというように、基本的に時

間による規定となっている。その後も、林甕臣『日本文典』

(明治二十七年(一八九四)三月)、中島幹事『中学普通文

典』(明治三十一年(一八九八)三月)、四宮憲章『新解日

本文法』(明治三十二年(一八九九)六月)、新楽金橘『中

等教育実用日本文典』(明治三十五年(一九〇二)四月)な

ど、いわゆる推量助動詞を未来の助動詞として一括しよう

とする文典が見られるが、これらは過去・完了助動詞も含

めて、時間という単一の基準によつて強引に律しようとい

う、強い統括意識が感じられる。しかしそのような演繹的

な理論構成のために、それぞれの助動詞の個性が見えにく

くなっているように見受けられる。

以上見てきたように、洋文典の枠組を踏襲して、いわゆる

推量助動詞を助動詞の変化語尾ないし接尾語と見て、あら

ゆる動詞の変化形は現在・過去・未来のいずれかの時制を

取らざるを得ない、という制約の中で理論を組み立てよう

とするのであれば、いわゆる推量助動詞は未来という時制の中に収めざるをえないのかもしれない（この時期には法の中に推量という分野は認められていなかった）。しかし、動詞とは独立した品詞として助動詞を立てるようになれば（むしろ近世はそのような考え方に近かつたわけだが）、いわゆる推量助動詞は未来時制以外にさまざまな意味を担つても構わない、というように見方が変わってくる。その後も、林甕臣『日本文典』を典型として、時制を中心に助動詞が編成される文典も見受けられるが、それは助動詞の体系化を図るために、あえて時制に制約を求めたのであって、押し付けられた枠組であつたわけではなからう。

およそ明治十年頃を境にそのような認識の転換が起こつたようであり、「推量」ないし「想像」というような助動詞のカテゴリを設けるものが多くなる。しかしそれでも、「未来」というカテゴリがすぐに駆逐されたわけではない。特にム・マシに関しては昭和十年代まで未来の助動詞という呼び方が残っている。確かに、ム・マシが承接する内容は未来の出来事であると言っても間違ひではない。その点も含めて、次節で見ていきたい。

### 3 推量

現代語文法であれば、推量はムード、モダリティを論じる場合に、最も中心的なテーマとなるが、幕末・明治初期の蘭文典、英文典には、法(mood)という文法分野は存在するものの、ここに「推量」というカテゴリが設けられることはなかった。

大庭雪斎『訳和蘭文語』（安政二年（一八五六））には、不定法、顕示（＝直説法）、命令法、疑示方（＝疑問法）の四つの法が挙げられている。

不定法【オンベパールデウエイセ】ナル者ハ、活辞ノ作用ヲ普通ナル義ニ観ル者ニシテ、而シテ人ト数トヲ定メス、独リ時刻ヲ示ス者是ナリ。（後略）

顕示法【アーントーネンデウエイセ】ナル者ハ、活辞ヲ以テシタル動作状態等ヲ、時刻ノ異ニ從テ直率ニ顕示スル者是ナリ。（後略）

命令法【ゲビートンデウエイセ】ナル者ハ命令ヲ使ムルニ用ヒ、或ハ亦タ願望勸厲諫争等ヲ示スニ用ユ。（後略）

疑示法【アーンフーゲンデウエイセ】ナル者ハ、疑或シテ言ヲ為シ、或ハ言ヲ為ス切実ナラサル者是ナリ。因テ亦タ好欲約束許可奨誘等ヲ示スナリ。（後略）



しかるに、法の一節の後に、割注で「喩ハ西行ガ」コ  
ロナキミニモアハレハシラレケリシギタツサワノアキノユ  
フダレ」ノ「ケリ」ハ、「アハレガシラレルワイ、ト決定シ  
タル「ケリ」ニシテ、也ニ当リ、「フリツミシタカネノミニ  
キトケニケリキヨタキガワノミツノシラナシ」ノ「ケリ」  
ハ「トケタデアラウ」「トケタソウナ」ト推量スル「ケリ」  
ニシテ、矣ニ当リ「シユルレン」ニ当ル。故ニ「シユルレ  
ン」「ソウデ」ト矣トハ、本法俗言ノ「デアラウ」デモアラ  
ウ」ト云ニ当リ、推量シテ決スル辞ニテ、時刻ハ乃チ将来  
ナリ。」(前編・中35オ・ウ)と説明されており、ケリの解釈  
に關してではあるが、「推量」という術語が用いられている。  
これはどこに起因するのだろうか。

『英吉利文典』(The Elementary Catechisms, English  
Grammar 第五版 慶応二年(一八六六))では、いくつの  
法があるかは必ずしも明らかにされていないが、少なくとも  
も *indicative*, *potential*, *subjunctive* の三つの法に關しては触  
れられている。

G.P.Quackenbos "First book in English Grammar" 1882 年  
は、法について以下のように説明し、五つの法を設けてい  
る。

Mood is that property of the verb which distinguishes the  
*manner* in which it affirms.

There are five moods; the Indicative, the Potential, the

Subjunctive, the Imperative, and the Infinitive

54

格賢勃斯『英文典直訳』(明治三年(一八七〇))による  
と、*indicative* には「直說法」、*potential* には「許可法」、  
*subjunctive* には「附屬法」、*imperative* には「使令法」(それ  
以後の『英文典直訳』では「命令法」)、*infinitive* には「不  
定法」という訳語が充てられている。

法ハ働詞ノ此性質其ハ仕方其ニ於テ其ガ極メル所ノ  
《仕方》ヲ差別スル所ノ《働詞ノ此性質》デアル

其処ニ五ノ法ガアル直說法、許可法、附屬法、使令法  
及ビ不定法ナリ 卷上 56ウ

『ピネヲ氏原板英文典』(明治三年(一八七〇)九月)で  
は、以下の六つの法が挙げられている。

Verbs have six modes: *indicative*, *subjunctive*, *imperative*,  
*infinitive*, and *participial*.

時代は若干下るが、栗野忠雄『英文典直訳』(明治二十年  
(一八八七)八月)の訳を見ると以下のようになっている。

働詞ハ六ツノ法ヲ持ツ、直說法、可能法、附屬法、命  
令法、不定法、及ビ分詞法ナリ 171

ところで、近世以来の国学において、カテゴリーの名称  
としての「推量」ではないが、意味の記述のために、「推量」  
「推し量る」といった概念はすでに用いられている。

富士谷成章『あゆひ抄』(安永七年(一七七八))のム

説明に、「未だ然あらぬ事をはかりあらまして言ふ言葉なり。みづから思ひ立ちて「いま行かむ」「いざ帰らむ」など言ふは裏なり。思ひやりて「とあらむ」「かからむ」など言ふは表なり。みな今より後をはかり、こゝよりかしこをはかれる心なり。」

メリの説明に、「大かた「なり」とよむに似ていささかたがふべし。「なり」は近く見聞く事を定かに詠む言葉なり。「めり」はそのおほむねをおしはかりてつかね言ふ心あり。里に「オモムキヂヤ」「様子ヂヤ」など言ふに似たり。心得やすからぬ言葉なり。」とあり、鈴木重胤『詞捷徑』（弘化二年（一八四五））も同じ箇所を引用する。

また、鈴木胤『言語四種論』（文政七年（一八二四））では、ベシについて、「次ニベシハ、コレモ同ジ格ニテ、事ノ状ヲ推ハカリ定ムル詞ナリ。」と述べており、幻裡庵『詞玉緒延約』のラシの説明に、「△ラムはラミにてラと疑ヒミと推量たる語なるを音便にてラムといへるなり「ラシはラと疑ヒシと思ひ定むる語なり。俗にいはばラムはデアラフ○ラシはキツトサヤウナラムとなり。」という一節がある。さらに、橋守部『助辞本義一覽』（天保六年（一八三五））のラムについて、「殆字の意に似て、其事に近づき、辺りづける形貌を見て、後々はしかじか成行らんと、推し量り、疑ふ詞ともなれる也。かくて彼めり、べらと、此らんとの差をいはば、彼めり、べらは、只近づき、辺りづける様子を、お

し量るのみにて行末を疑ふまでの定はなし。」説明されており、黒沢翁麿『言霊のしるべ』（安政三年（一八五六））には、ラムについて、「らんは推量る心の辞なり」という指摘がある。

以上見てきたように、「推量」あるいは「推し量る」という術語ないし概念は、近世の国学において推量助動詞の意味を説明するために常套的に用いられていたことを確認できたと思われる。それが蘭文典、英文典における時制という窮屈な枠組で、日本語のいわゆる推量助動詞を記述しようとした場合、日本語の実情にあつた説明をあてようとして、蘭文典、英文典の枠組をはみ出して、自然に用いられることになつたのではないだろうか。

さて、近代初期の日本語式文典においても、法に関しては、直説法・不定法・命令法・疑問法・接続法などを踏襲している。

古川正雄『絵入智慧の環』（明治五年（一八七二）五月）でも、法を「はたらきことばのいひかたのこと」として、五つを挙げている。「はたらきことばのいひかたとはそのもちひかたのことなり。このひかたいろくあれどもこれをつづめてつねのいひかた、つなぐいひかた、いひつけのいひかた、つきぬいひかた、うちけすいひかたのいつにさだむ」とあるが、その後それぞれ説明があるが、それぞれ「つねのいひかた（直説法ともいふ）」「つつなぐいひかた

(疑問法ともいふ)、「いひつけのいひかた(命令法ともいふ)」「つきぬいひかた(不定法ともいふ)」「うちけすいひかた」(言い換えなし、英文典では否定は法には含まれていないことよると思われる)という題名がついている。ただ、前節で未来時制について抜き出したところで、「いまよりのちのことをおしはかりてなにくするであらうとやうにいふを、第一の未来のはたらきことばとなづけ、いまよりまへのことをおしはかりてなにくしたであらうとやうにいふを第二の未来のはたらきことばとなづけて、こゝにこれをわかちしるすべし」と、「おしはかる」といふ言い回しが用いられていた。

黒川真頼『皇国文典初学』(明治六年(一八七三)一〇月)『日本文章法初歩』(明治六年(一八七三)五月)では、「文法は、十法あり、されど、旨とする法は、四法にして、その余の六法は、四法に附属せる法なり」として、まず四法、直説法たゞにとく・命令法おほする・疑問法うかがふ・禁制法いましむるを挙げ、続けて六法、附説法つけてとく・連続法つゞくる・標準法めあて・量限法はかる・含蓄法ふくむる・成就法なるを挙げる。

田中義廉『小学日本文典』(明治八年(一八七五)一月)でも、「第二十八章 動詞の法」において、以下のように論じる。

大凡文を綴り、或は説話をなすに方りて、作動の次第

を定め、自他の区別を現すに定則あり、これを動詞の法といふ。法に五個あり、即不定法、直説法、命令法、接続法、疑問法なり。

卷三・13ウ、14オ  
中根淑『日本文典』(明治九年(一八七六)三月)でも同様である。

○動詞ハ、文章ノ中ニ於キテ、百般ノ働キヲ為ス者ナレ共、自法アリテ、其ノ中ニ統括セルコトナリ、抑法ト云フハ、過去・現在・未来・ノ三時ニ拘ラズ、其ノ語ノ属スベキ、定規アルヲ云フナリ、例ヘテ云ハバ、余行ク・ト云ヘバ、直チニ己ノ行クコトヲ顯スナリ、君行ケ・ト云ヘバ、人ヲ勸メテ、行カシムルコトヲ顯スナリ、今此ノ類ノ法ヲ分チテ、四箇トス、曰ハク直説法、曰ハク不成法、曰ハク疑問法、曰ハク命令法、  
下・16オ・ウ

安田敬齋『日本小学文典』(明治十年(一八七七)一月)では、動詞の法という章があり、「凡ソ作文、説話ヲ、ナスニ、作動ノ次第ヲ定メ、自他ノ区別ヲ徴ハスニ、規則アリ、是ヲ動詞ノ法ト云即、不定、直説、命令、接続、疑問、等ナリ」と論じ、春山弟彦『小学科用日本文典』(明治十年(一八七七)二月)でも、顯示法・疑示法・命令法の三つが挙げられている。藤田維正・高橋富兄『日本文法問答』(明治十年(一八七七)三月)にも、直説法・命令法・疑問法・接続法と四つの法が挙げられている。しかしながら、洋文

典由来の法という文法領域を受け継ぐ文典はほぼ明治十年あたりを境にして見かけなくなる。

物集高見『初学日本文典』(明治十一年(一八七八)七月)は、作用言の法として、とりあえず命令法、希求法、疑問法、さらに崇敬法(希求法、中でも崇敬法は洋文典では挙げられない)が論じられている。しかし、いわゆる推量助動詞に関しては、接辞の中で論じられ、ム・マシを含む将来辞と、ラシ・ラム・メリ・マジを含む想像辞との他、ベシを含む決定辞、ナリを含む現在時、ケムを含む過去時、ベシを含む決定辞、ジを含む否不辭などのカテゴリーに分けられていた。そのうち、将来辞と想像辞に関しては、「将来辞は「教しえむ」「習はまし」ノ如ク作用ノ活辞ニ附テ其業作ニ未来ノ時ヲ見スニ用フル者トス」、「想像辞ハ「彼は書を誦むらし」「彼は字を習ふらむ」「雨零らば来まじ」「月出では去ぬまじ」ノらしらむまじノ如ク作用ノ活辞ニ附テ他ノ作業ヲ想像シ或ハ想像スル所ノ事物ノ形状ニ因テ不切実ナル作業ヲ見スニ用フル辞トス」というように定義している。このように、ム・マシについては未来という時制という枠組で説明し、ラシ・ラム・メリ・マジについては想像という「モダリティ」の枠組で説明しようとしている。

すなわち、いわゆる推量助動詞をカテゴリー化するため、時制としての「未来」と、モダリティとしての「推量」

との、主として二つの方向のせめぎ合いの上にカテゴリー化が行われている。前者、すなわちいわゆる推量助動詞をすべて未来と割り切ろうとする文典については前節で概観したが、やはりいわゆる推量助動詞の意味機能のすべてを時制であると割り切るには無理があるだろう。たとえば、時制という枠組みを採って誠実に議論しようとするれば、ケムを「過去未来」(高津敏三郎『日本文典』)などと明らかに矛盾した言い方をしなければならなくなる。

他方、推量助動詞全体を推量とするものは、大和田建樹『和文典』(明治二十四年(一八九一)四月)の「推量」、大宮宗司・星野三郎『日本小文典』(明治二十五年(一八九二)一月)の「想像辞」、落合直文・小中村義象『中等教育日本文典』(明治二十五年(一八九二)三月)の「想像辞」、大宮宗司『初等教育日本文典』(明治二十七年(一八九四)二月)の「想像辞」、渋谷愛太郎『てにをは入門』(明治二十九年(一八九六)四月)の「推し量る」、鳥山謙『国文の栞』(明治三十年(一八九七)七月)「想像」、味岡正義・大田寛『中等教育皇国文典』(明治三十一年(一八九八)七月)の「想像辞」、鈴木忠孝『新撰日本文典』(明治三十二年(一九九九)十二月)の「推辞」など、少なからざる文典がこの立場を採る。

しかしながら、圧倒的多数のものは、ム・マシを「未来」と時制扱いし、それ以外のものを「推量」(または「想像」

など)とモダリティ扱いをするというように(ただしジ・マジは多くのものが「打消」とする)折衷的なカテゴリーを採用している。「推量」と呼ぶほうが直観的にもしっくりくるところがある一方で、英文典から受け入れられた、過去・現在・未来という時制の体系の中の未来を担うものとして、ム・マシを当てはめることも捨てがたい、というような判断が背後にあったのではないだろうか。

そのような中にも、各助動詞には、時制的な側面とモダリティ的な側面とがあると考え、(二部のものであっても)その両者を併記することによって、時制とモダリティとのどちらかに位置付けなければならないという困難を回避したと思われるものもある。高橋清太郎『日本文法伝精神』(明治二十四年(一八九一)四月)、落合直文・小中村義象『中等教育日本文典』(明治二十五年三月)、西田敬止『応用日本文典』(明治二十七年(一八九四)一月)、岡崎遠光『日本文典』(明治二十八年(一八九五)一月)、関根正直『普通国語学』(明治二十八年(一八九八)三月)、大平信直『中等教育国文典』(明治三十二年(一八九九)七月)、和田萬吉『日本文典講義』(明治三十八年(一九〇五)十二月)などにそのような処理が見出される。

このように、時制としての「未来」と、モダリティとしての「推量」とが併存する状況は、昭和十年代まで残り、昭和二十年代以降、やっと現在と同じく、すべてを「推量」

助動詞と呼ぶ体系に落ち着く。その間、五十年以上もの間、いわゆる推量助動詞は、およそ未来と推量との拮抗関係にあった、もっと具体的にはム・マシが未来、それ以外が推量と分属される不安定な状態にあった(ム・マシとベシ・ラム・ケム・マシ・ラシとはそれほど決定的に意味が異なるであろうか)。しかし、そのような不安定な状態は、研究者をいわゆる推量助動詞の本質について深く考えるよい機会ともなつたように思われる。

実は、山田孝雄『日本文法論』(明治四十一年(一九〇八)九月)において、「推量をあらはす複語尾」にメリ・ベシ・マジ・ラム・ラシが、「非現実性の思想をあらはす複語尾」にム・マシ・ジ(およびズ)が振り分けられ、形態的には、前者は終止形接続であり、後者は未然形接続であるという違いがあるのであるが、意味・機能的には、それらはそれぞれ、前者は「推量とは現実にしかあるべしと推測せるをいふ」、後者は「この複語尾は否説予想等すべて一回も経験に上らぬ事につきて陳述をなすに用いゝるなり」というように、現実／非現実(一回も経験に上らぬ)という明確な対立として、意味的・理論的に深められているが、それはム・マシが未来を表わし、メリ・ベシ・マジ・ラム・ラシが推量を表わす、というこの時代の助動詞分類のしかたと思いの外一致していることが了解される。

そのような観点でその後の展開を辿ってみると、松下大

三郎『標準日本文法』(大正十三年(一九二四)一月)、さらにその改訂版である『改撰標準日本文法』(昭和三年(一九二八)四月)において、「未然態」にム・マシ・ジが属し、「推想態」にケム・ラム・ラシ・メリ・ナリが属すというのも、その延長上であることがわかる。ただ、「未然態」は時相の一態であつて、既往、現在、未来に拘らず事件を未然の事件として取扱ふものである。「推想態は動作動詞の一態であつて判定性の不明確であることを表すものである。」というように概念規定されると、山田孝雄によつて明確に現実／非現実という違いとして示された対立が、かえつて従来通り、未然態は時制上の未来として位置付けられることになり、また推想態は「判定性が不明確」、すなわちはっきり断定できない場合に用いられると、むしろ断定と対立するように論じられ、未然態(↑↓既然)と推想態(↑↓断定)とはまったく異なつた働きをしているような印象を与えるようになる。

松尾捨治郎『国語法論攷』(昭和十一年(一九三六)九月)においても、ム・ベシが「時の助動詞」のうちでも「未来の助動詞」、またラム・メリ・ベシ・ラシ・マシ・ケムが「想像の助動詞」(そして、ジ・マジは「打消の助動詞」)に分けられているが、現代の目から見ると奇異な感じを覚えるものの、文法研究の歴史的な展開の上に位置付けてみれば、かえつて明治二十、三十年代の研究に近い理論的枠組に先

祖張りしているものであることがわかる。ただし、もうこの時点では、「未来の助動詞ないし想像(ないし推量)の助動詞」とはどのようなものであるか、というような言及は、恐らく自明のものと思われるようになったためか、なされなくなる。

しかし、そのような未来・推量の併存状態は昭和十年代までで、それ以降は現在と同じく、すべてをまとめて推量助動詞と呼ぶようになる。たとえば、時枝誠記『日本文法文語篇—上代・中古—』(昭和二十九年(一九五四)四月)では、ム・マシ・ラム・ケム・ベシ・メリ・ラシ・ナリ(推定・伝聞)を「推量の助動詞」と呼ぶが、推量の助動詞に関する説明は一切なく、いきなりムの説明が始まるし、山崎良幸『日本語の文法機能に関する体系的研究』(昭和四十年(一九六五)十二月)では、ム・ムズ・ラム・メム・マシ・ラシ・ケラシ・ベシ・ベラナリ・ジ・マジ・メリ・ナリを一括して、「推量の助動詞」と呼んでおり、その説明も、かろうじて「これらの助動詞はいずれも言語主体の推量判断を表現するのに用いられる。」といった程度に留まる。

#### 4 指定

さて、前節でいわれる推量助動詞は、長い間未来と推量との拮抗関係にあった、と論じた。しかし、正確には若干修正が必要である。一つは、ジ・マジを打消助動詞に入れて

る文典も少なくなかったということであるが、これは現代でも打消推量と呼ばれるように、打消も推量もどちらの側面も持っていることは自明のことであり、カテゴリーとしてはどちらかに入れなければならないが、どちらに入る可能性もある。もう一つは、ベシを指定助動詞に入れるものが散見されることである。高橋清太郎『日本文法伝精神』(明治二十四年(一八九二)四月)では「決定」、村山自彊『国

語学文典』(明治二十四年(一八九二)十二月)では「判決辞」、大久保初雄『普通教育国語文典』(明治二十五年(一八九二)二月)同『普通日本文典』(明治二十五年(一八九二)十一月)では「指定」、木村春太郎『日本文典』(明治二十五年(一八九二)十一月)では「指定辞」、大川真澄『普通教育日本文典』(明治二十六年(一八九三)四月)では「決定」、遠藤国次郎『実用文典』(明治二十八年(一八九五)七月)では「決定辞」、渡辺弘人『新撰国文典』(明治三十年(一九〇七)三月)では「決定辞」、岡直廬『中等教育国

文典』(明治三十年(一九〇七)三月)では「指定辞」、大久保初雄『日本中文典』(明治三十年(一九〇七)九月)で

は「指定」、和田萬吉『新撰国文典』(明治三十年(一九〇七)十一月)では「指定」、中島幹事『中学普通文典』(明治三十一年(一九〇八)三月)では「決定」などと、それ以降も多く見受けられる。

これは直接には大槻文彦『語法指南』(明治二十三年(一八九〇)十一月)の影響であると考えられる。大槻はその後も『広日本文典』(明治三十年(一八九七)一月)、『中等教育日本文典』(明治三十年(一八九七)一月)、『日本文典初歩』(明治三十年(一八九七)十一月)、『日本文法教科書』(明治三十三年(一九〇〇)十一月)、『日本文法中教科書』(明治三十五年(一九〇二)五月)と繰り返しベシを「指定の助動詞」とであると論じている。

ここで単に、ベシだけが指定助動詞とされるのであれば、それほど問題とはならないだろうが、いわゆる断定助動詞ナリ・タリと合わせて指定助動詞というカテゴリーを立てているところが注目される。

○指定ノ助動詞 次ニ挙グルなり、たり、べし、等ハ、事物ヲ指シ定ムル意アレバ、コレヲ指定ノ助動詞トス。

大槻文彦『語法指南』55

(24) べし 心ニ推シ量リテ定ムル意ノ語ナリ、「斯クアルべし」、「我レ行クべし」、「ノ如シ」。又、強ク指定シテ、命令スル意ヲモナス、「疾ク行クべし」、「速ニ来べし」、「ノ如シ」。

同 57

これは、ナリ・タリが名詞に承接して「こうこうである」と断定を下しているようなニュアンスがあるのに対して、ベシが動詞に承接して同様の働きをしているように思われる、ということなのだろうが、それ以外にも、ベシは、他の推量助動詞がおよそ終止・連体・已然の三つの活用形しか持たないのに対して、およそすべての活用形を持っているという点など、特殊であることからそのような処理がなされたのであろう。

確かに、ナリ・タリとひとまとめにしてカテゴリー化することは、恐らく大槻文彦の独自の考えであるようだが、ベシの特殊性ないし断定に近いという特徴はそれ以前にも少なからず指摘されていた。

富士谷成章の『あゆひ抄』の「べし」の条に、「その勢を知るに、かくありてよき程なりと測り定めて言ふ言葉なり。里に「コロアヒ」など言ふ程の心なり。まさしく当てんには、心得て「ネバナラヌ」と言ひ「ハズ」と言ひ「ソナ」と言ふ、また、「コトガナル」などの里言、互に得たる所あり。」

中根淑『日本文典』（明治九年（一八七六）三月）でも、「動詞ノ体ヲ具ヘタル助動詞アリ、之ヲ半助動詞ト云フ、」として、半助動詞にベシ・得・能フ・度クが挙げられている。

物集高見『初学日本文典』（明治十一年（一八七八）七月）

では、ベシを決定辞に所属させ、「決定辞ハ「褒むべき事ぞ」「感ずべき志なり」ノ如ク活辞ニ見ル、時ハ未来ニナリ或ハ想像ヲ呼ブニ似テ決定ノ義ニ乏シト雖モ然レドモ其未来ニナリ想像ニ似ル所ノ動作モ遂ニ然ラザルコト能ハザル事理ナルハ作業ニ先テ已ニ疾ク決定セルヲ以テ亦「往くべし」「聴くべし」ノ如ク命令ヲモ示シ得ル者ナリ故ニ辞義ヲ説キ来レバ将来辞ニモ収ム可ラズ想像辞ニモ入ル可ラザルヲ以テ姑ク此名ヲ命ジテ「辞ニ置ク」と論じている。

このように、ベシをナリ・タリとともに指定助動詞とするかどうかはさておいて、ベシは他の推量助動詞とは異質であるという認識は広く持たれていたようである。

#### おわりに

本稿では、現代の目から見て研究水準が低かったとして、あまり顧みられることのなかった近代文典も、文法的な認識史という観点から見直してみれば、現代の文法認識とは異質な文法観が見えてくるのではないか、という問題関心のもと、いわゆる推量助動詞に焦点を当ててみた。主語あるいは名詞、過去・完了助動詞についてはすでに問題関心の近い研究が見られる。現代語文法がある意味で逼塞しつつある現在、このように現代語文法の理論的基盤を相対化してみることは、今後の研究の進展にも有益なことなので



はなかるうか。

資料（近代の文典資料そのものの出典は、今回は紙数の都合でリストアップしない。ただ、多くのものは、国会図書館蔵本である。したがって、以下に示す資料はおよそ近世のものである。）

荻生徂徠 訳文箋蹄・訓訳示蒙、伊藤東涯 操楓字訣・助字考・用字格、皆川淇園 夷字解・助字詳解・虚字詳解（以上、『漢語文典叢書』汲古書院）、箕作阮甫 和蘭文典 前後編 大庭雪齋 訳和蘭文語（以上、『近世蘭語学資料 和蘭文法書集成』ゆまに書房）、英吉利文典 杉本つとむ編『日本英語文化史資料』八坂書房、富士谷成章『あゆひ抄』あゆひ抄新注』桜楓社、一步・鈴木胤 言語四種論『勉誠社文庫』勉誠社、鈴木重胤 詞捷徑・鶴峯戊申 語学新書・橘守部 助辞本義一覽（東京大学総合図書館蔵本）

### 参考文献

福井 久蔵（一九〇七・一〇）『教育並に學術上より見たる日本語文法史』大日本図書  
福井 久蔵（一九三四・三）『増訂日本文法史』成美堂  
時枝 誠記（一九四〇・一一）『国語学史』岩波書店  
福井 久蔵（一九四二・二）『国語学史』  
山田 孝雄（一九四三・七）『国語学史』宝文館  
古田 東朔（一九五七・一一）『洋文典における品詞訳語の変遷と固

定』『香椎瀉』第三号（福岡女子大学）

古田 東朔（一九五八・七）『明治以後最初に刊行された洋風日本文典—古川正雄著『絵入智慧の環』について—』『香椎瀉』

### 第四号（福岡女子大学）

古田 東朔（一九五八・一〇）『日本文典に及ぼした洋文典の影響—特に明治前期における—』『文芸と思想』第十六号（福岡女子大学）

古田 東朔（一九五九・一）『中根淑『日本文典』の拠つたもの—明治初期洋風文典原点考2—』『解釈』第五卷第一号

古田 東朔（一九五九・三）『田中義廉『小学日本文典』の拠つたもの—明治初期洋風文典原点考3—』『解釈』第五卷第三号

古田 東朔（一九六〇・一）『物集高見博士『日本文語』の拠つたもの—明治初期洋風文典原点考4—』『解釈』第六卷第一号

築島 裕・古田 東朔（一九七二・一一）『国語学史』東大出版会

古田 東朔（二〇〇二・八）『明治前期の洋風日本文典』『国語と国文学』第七十九卷第八号

山東 功（二〇〇三・一）『明治前期日本文典の研究』和泉書院  
仁田 義雄（二〇〇五・三）『ある近代日本文法史』和泉書院

（い）じま まさひろ 大学院人文社会系研究科 准教授

\*近代文典におけるいわゆる推量助動詞の分類対照表

・各助動詞の枠内は、意味の記述(の一部)を抜き出したものと、助動詞の種類(カテゴリー)とを区別していない。  
 ・ナリに括弧のあるものは断定助動詞のナリと伝聞推定のナリとを区別していないと思われるものである。  
 ・斜線が引かれているものはそもそも助動詞が挙げられていないもの、「説明なし」とあるものは助動詞は挙げているが説明のないものである。

文部省編輯寮「語彙別記」明4・11	ム	マシ	マジ	ベシ	ラム	ケム	ラシ	メリ	ナリ
古川正雄「絵入知慧の環」明5・5	ウ	マシヤウ	マイ	子推しある ゆへき	アラウ	タアラウ	サウナ	トニエマス	ヂヤ
高田壽・西野吉海「皇国文法階梯」明6・8	将ウ	ウ			アラウ	タアラウ	サウナ	オモヘル	(チヤ)
渡部栄八「詞のたつき」明8・4	未来								
田中義廉「小学日本文典」明8・11	未来								
中根淑「日本文典」明9・3	充分未来	未来	打消	充分未来	充分未来	不充分未来	充分未来		
藤田聖一・橋寛「日本文法問答」明10・1	第一未来			第一未来	第一未来	第二未来			
安田敬齋「日本小学文典」明10・1	未来			未来	未来				(現在)
春山弟彦「小学科用日本文典」明10・2	未来			未来	未来				
里見義「雅俗文法便覧」明10・8	将			不為	将有	将来			也
里見義「雅俗文法」明10・10	将			不為	将有	将来			也
物集高見「初学日本文典」明11・7	将来辞	否不辞	想像辞	決定辞	想像辞	過去辞	想像辞		現在辞
中島操「小学文法書」明12・1	未来								
溝淵幸雄「言葉の橋立」明12・10	未来	不の意	想像禁止	命令	想像	過去	想像		
五十嵐政雄「言霊真澄鏡」明13・3	未来				自疑	去言の疑	他疑		







岡直廬「中等教育国文典」明30・7	未来辞		打消辞	指定辞	過去辞	指定辞	
大久保初雄「日本中文典」明30・9	未来 推量		打消	指定 推量	(熟語)	推量	咏嘆
岡倉由三郎「日本文典大綱」明30・11	思惟法 推量		打消 <small>否勢の想像法</small>	想察法 推量	過去 推量	推量	断定法
大槻文彦「日本文典初歩」明30・11	未来 推量		打消	指定 推量	未来 推量	推量	指定
和田萬吉「新撰国文典」明30・11	未来		拒否	指定 推量	過去 想像	現在	指定
塩井正男「中学日本文典」明30・11	未来		否定	未来 指定 現在	推量	現在	詠歎
中島幹事「中学普通文典」明31・3	時刻		打消	推量	時刻		決定
三土忠造「中等国文典」明31・4	時 <small>(采葉)</small> 推量		打消	推量	想像	推量	指定
白鳥菊治「中等新撰日本文典」明31・4	未来 推量		打消	命令 推量	想像	推量	(指定)
椋下三郎・富永静「中等新撰日本文典」明31・4	時 <small>(未来)</small> 想像辞		否定	形状詞を造る	想像	想像	音調
柴田正蔵「中等教育皇国文典」明31・7	未来		否定	想像	想像辞	想像	決定辞
上谷宏「中等新撰日本文典」明31・8	未来		否定	命令 推量	推量		感歎
大林徳太郎「中学日本文典」明31・12	未来		否定	推量			(断定)
関根正直「国文学」明31、32	現在		半拒否	命令 推量	推量		(断定)
高田宇太郎「中等国文典」明32・3	未来辞		拒否辞	半決定	現在推量		(決定)
俵野孝「後編野」 <small>字教科普通文典</small> 明32・4	未来		打消	現在推量	想像辞		(決定)
四宮憲章「新解日本文法」明32・6	未来格		打消	推定			(現在)
瓜生憲・瓜生壽「国文法詳解」明32・6	未来辞		打消	想像格			
大平信直「中等教育国文典」明32・7	未来		非否	指定 推量	現在想像辞	現在想像辞	余情辞
藤井鏡「日本文法筌蹄」明32・7	未来		打消	推量	想像格		感嘆
手島春治「新撰日本文典」明32・9	仮定		打消	推量	推量		



窪田亮吾「国文典講本」明35・8	未来	推量	打消	打消	決定	推量	推量	推量	推量	咏嘆
三石賤夫「日本文典」明35・9	未定	推量	打消	推量	推量	非確定	推量	推量	推量	感嘆
鈴木暢幸「日本文法」明35・9	時(未定)	推量	打消	推量	推量	非確定	推量	推量	推量	(指定)
佐々政一「日本文典」明35・10	未来	推量	非確定	推量	推量	推量	推量	推量	推量	感嘆
三石賤夫「文典の棗」明35・11	未来	推量	推量	推量	推量	推量	推量	推量	推量	感嘆
糸左近「雅俗語和漢の文典」明35・11	未来	推量	推量	推量	推量	推量	推量	推量	推量	決定
吉田弥平「国文典教科書」明35・12	時(未定)	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	(指定)
横地清次郎「国文法教科書」明36・2	未来	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	詠歎
大宮兵馬「中等日本文典」明36・3	時(未来)	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	(指定)
永井一郎「国文法要義」明36・4	時(未定)	推量	拒否	推量	推量	推量	推量	推量	推量	詠歎
富田良穂「てにをは俗解」明36・8	未来	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	(指定)
上村左川「新撰和英文典問答」明36・10	未来	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	(断定)
警備研究会「師範教科国語典」明36・12	未来	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	(指定)
林彦兵衛「國語標準まなび伝授書」明36・12	(説明なし)	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	(説明なし)
千勝義重「国語早わかり」明37・1	未来	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	(指定)
明治書院編輯部「女子日本文典」明37・2	時刻	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	(指定)
畠山健「中等日本文典」明37・3	時(未来)	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	(指定)
松本龜次郎「曼文辭源日本文典」明37・7	時(未定)	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	詠歎
蓮沼諄三郎「品詞捷徑」明37・8	時(未定)	推量	打消	推量	推量	推量	推量	推量	推量	推量





金澤庄三郎「日本文法講義」明40	未来	推量	打消	指定	推量	未来	推量	詠歎
松平静「文法及作文」明41・1	時(来悉)	推量	推量	指定	推量	未来	推量	詠歎
山田孝雄「日本文法論」明41・9	時(来悉)	推量	打消	推量	推量	未来	推量	詠歎
藤沢倉之助「文語法」明41・10	時(来悉)	推量	打消	推量	推量	未来	推量	詠歎
三矢重松「高等日本文法」明41・12	想像(推量)	打消	推量	想像(推量)	推量	未来	推量	指定
本多龜三「普通文法集成」明43・2	未来	推量	打消	推量	推量	未来	推量	詠歎
堀江秀雄「日本文典問答」明43・6	未来の動作	未来動作推量	弱き意の否定	推量して指定	現在想像	動作を推量	根拠ある推量	詠歎
中等教科研究会「中等教科摘要国文典」明43・7	未来	打消	弱き意の否定	推量	未来	推量	推量	詠歎
八木立礼「歌文枢要」明43・7	未来の推量	打消	弱き意の否定	推量	未来	推量	推量	現在
林治一「国文法解義」明43・8	時(来悉)	推量	打消	推量	推量	未来	推量	詠歎
明治中学会「国文法講義」明44・4	未来	推量	打消	指定	推量	未来	推量	詠歎
神谷保朗「増訂中等教科国文法要綱」明44・6	時(未来)	打消	打消	指定	推量	未来	推量	感動
教育研究会「小学校教員検定受験用国文法講義」明44・9	時(未来)	打消	打消	指定	推量	未来	推量	詠歎
藤岡勝二「中等日本文典」明44・11	時(来悉)	推量	打消	推量	推量	未来	推量	指定
芝野六助「語法要覽」明45・6	時(来悉)	推量	打消	推量	推量	未来	推量	指定
吉岡郷甫「文語口語対照語法」明45・7	未来	推量	打消	推量	推量	未来	推量	指定
落合直文「普通文典」大4・7	未来	推量	打消	推量	推量	未来	推量	指定
保科孝一「大正日本文法」大6・10	未来	推量	打消	指定	推量	未来	推量	詠歎
吉沢義則「中等日本文法教科書」大6・11	未来	推量	打消	指定	推量	未来	推量	指定